

## ヒップホップ

稲宮 健一

孫娘がよち歩きの時、お人形のように可愛らしく、壊れ物を触るように手をつないで歩いた。息子家族と旅行した時のことだった。孫から数日前にスマホにメッセージが入り、大学の部活で、ヒップポップを踊るので、見に来てねとの知らせだった。当日、西武線清瀬駅近くの清瀬けやきホールに向かった。収容人員五〇〇人程のこじんまりしたホールだ。前二列は同窓生の応援団で占められていた。

定刻六時、会場の照明が消え、ラップミュージックが鳴り始め、二〇人程の集団にスポットライトが当たり、ダンスが始まった。全員が同じタイミングで、リズムに合わせて一緒に同じように手を伸ばし、縮め、足を踏み、首を振る。ダンスの一団は、舞台全体にわたり、所狭しと、端から端まで揃って動き、踊りまくる。スポットライトも一団に合わせて追いかけて照らす。そして、次々とチームが変わりダンスが続く。衣装は古いジーンズが好まれるように、一見フリー・マーケットに出ている服と似ているが、一団としては揃っている。今回のオリンピッククの中に、ブレイキングがあったが、手足の動きはこれに似ている。ヒップホップは、元々米南部のアフリカン・ミュージックが発祥で、南部の昼間のきつい単純労働を癒すため、仲間が集まって心身の解放を得るための生活のリズムだった。

孫は学部の三年生、農学と工学の二学部を持つ国立大学で、男女の比率はほぼ同数、このダンスのチームも同じ構成である。チーム毎に十分に全身を使ってリズムに乗り、前列にいる同級生から応援の発声も加わって、舞台と一体になって雰囲気盛り上げている。この活動を通じて一生の友ができるのだと感じた。

振り返って、我々の頃は体育系では古い上下の縛りのある中で練習に励むか、縛りのない同好会に参加するか。また、ノンポリでは雀荘や、歌声喫茶で合唱などがあった。一方、当時は左翼が正義だと信じる向きは、大きな看板を立て、デモに参加した。